

キリコとラン

奄美市立屋仁小学校 五年 中山 南希

「まったく。この村には私の友だちにふさわしい人なんて一人もないんだわ。」

キリコは今日も目をつりあげて怒っている。キリコには一人も友だちがいなかった。なぜなら、人が困っていてもしらんぷりしていたからだ。村の子どもたちはキリコのことをこわがり、友だちにならなかったのだ。そんなことに全く気付かないキリコは、自分にぴったりの友だちを探すための旅に出た。

ある日の朝、キリコはとなり村のふんわり村にたどり着いた。すると、湖のそばで一人の女の子は、落としてしまったリンゴをなみだをうかべてひろっていた。リンゴは辺り一面に広がり、まるで大きな赤いじゅうたんのようだった。キリコは、ふんと鼻で笑い、

「自分で落としたものは、自分で拾うのが当たり前だわ。まったく歩きにくいわね。」

とつぶやくと、湖のそばに落ちていた石を思い切りけとばした。そのしゅん間、足をすべらせて湖に落ちてしまった。

「た、た、たすけて。おぼれる。」

もうだめだと思ったその時、手がぐいっとひっぱられて岸にあがることができた。顔をあげると、そこにはリンゴを落としていた女の子が心配そうな顔で立っていた。女の子は、

「大丈夫。けがはしていない。」

と言うとキリコのかみや体をやさしくふいた。

「なんで私のことを助けたのよ。私は、あなたのこと助けなかったのに。」

「だって、困っている人を助けるのは当たり前ですよ。」

そういうと女の子はまるで花のようににっこりと笑った。「この子と友だちになりたい。」キリコは、初めて心からそう思った。

「私は、キリコ。あなたの名前は。」

「ランよ。キリコは何をしているの。」

「友だち探しの旅をしているの。あの…私の友だちになつてくれない。」

「こんな出会い方をするなんて何かのえんね。もちろんいいわよ。よろしくね。」

そういうとランは小さな手をさしだした。キリコはそっとその手をにぎりかえた。手のあたたかさが体全体に伝わって、ふわふわと空にうかんでいきそうだった。

「あつリンゴを拾わなきや。夕方までにとり町のお客さんに届けないといけないの。」

ランは、いそがしくリンゴをひろいはじめた。キリコも、足下に落ちていたリンゴを一つ手にとった。「人を助けたり、やさしくしたりすると友だちになれるのかもしれないわ。」そう考えながらいっしょにリンゴを拾った。二人のそばをたくさんの人が素通りしていく。中には「じゃまだからさつさとどける。」と言ってすぎていく人もいた。それでもキリコは、もくもくとリンゴをひろった。一時間程たったころ、ついにリンゴを拾い終わった。

「よかった。キリコのおかげよ、ありがとう。」とランが汗を光らせて言った。キリコは、これまでは手伝うことも、お礼を言われることもなかったのに、なんだかかくすぐつたい気持ちになった。そして、キリコもランといっしょにリンゴを届けることにした。

すっかり日もしずんだ頃、二人はやつととなり村のお客さんの家についた。ランが、

「ごめんください。遅くなつてすみません。」

と戸をたたくと、中から女の子が出て来た。

「遅いじゃない。どれだけ待たせるつもり。」

と目をつり上げて怒ってきた。二人はリンゴを落と

してしまい、時間がかかったことを説明した。すると、女の子はますます怒って、

「そんなの関係ないわ。落とすのが悪いんでしょ。」

まったくしようもない。」

と言った。「ああ、この子はこれまでの私だ。」キリコはそう思い心がいたくなかった。

満月が銀色に照らす夜道を、とぼとぼと帰りながら、キリコは自分のことをランに話した。はずかしいような、くやしいような気持ちがあふれてなみだがぼろぼろとこぼれた。

「いつも私のことしか考えていなかったの。それじゃ友だちもできないわよね。」

「大丈夫。キリコはもう何が大切か分かっているのでしょう。」

そう言われて、ふとふり帰ると、ランの体が透けて見えた。なみだをふいても、次第にランの体が透けて見えなくなっていく。

「どうしたの、ラン。」

「もう時間がないの。でも大丈夫。私はいつも森にいるわ。たくさん友だちを作つてね。」

そう言うと、ランは月の光にとけるように消えた。その後には、フウランの花が一つ落ちていた。それは、キリコが毎朝水をかけてかわいがっていた花だ

った。キリコは花をそつとひろうとむねにだいて泣いた。

次の日の朝、キリコは自分の村に帰りついた。すると、村の入り口のガジュマルに、風船をひっかけて困っている女の子がいた。キリコはフウランの花をにぎりしめ言った。

「だいじょうぶ。手伝おうか。」